

言葉の教育は生れた翌日から

その教育法の基本は、やはり、“言葉の教育”であった。それも、生れた翌日から、カールの眼の前に指を突き出して、カールがこれを見詰めると、「指！ 指！ 指！ 指！……」と言って言葉の教育を始めた、といふ事が述べられてゐる。

このやうに、子供の眼の前にいろいろな物を取り出して見せ、その名前を繰り返して発音して、これを聞かせたのである。そのため、カールは普通の子供よりもずっと早い時期から、はっきりと言葉が言へるやうになった、と述べられてゐる。

ついで、カールを抱いて家の中を歩き回り、目に着く物の名前を一つ一つ教へて行つたのである。それが済むと、今度は家の外に連れ出し、そこでもまたカールの目に入る物の名前を教へて行つたものである。

かうして、言葉がたくさん言へるやうになると、その言葉を使つていろいろなお話をしてやつた。毎日欠かさず、さういふ事を根気よくしてやつたと言ふ。だから、五、六歳の時には、およそ三万語もの言葉が身に着き、それがカールの知能を偉大なものにした、と考へられてゐる。

言葉は人間だけのもの

アメリカでは、一九三〇年以降、チンパンジーの子供を人間の子供と一緒に育てることによって、両者の比較を調査する研究が盛んに行はれてゐる。

ケログ夫妻、ヘイズ夫妻、レイノルズ夫妻などの研究は特に有名で、早くから我が国にも紹介されてゐる。ケログ夫妻は、一九三一年、生後七か月半のチンパンジーを、生後十か月の自分たちの子と、双子の兄弟のやうにして育ててゐる。

このやうにして、人間の赤ちゃんと同じ条件で育ててみても、チンパンジーの子供は言葉を覚えることが出来なかつたと言ふ。このやうに「人類に次ぐ知能の高いチンパンジーでも言葉が覚えられない」といふ事は、「言葉が覚えられ、これを使ふことが出来るのは、この地球上の多くの生物の中でも、唯人間だけである」といふ事を意味するものである。